

# まんだら通信

第253号(通巻287号)

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084  
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉  
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺  
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040  
<http://www.shiunji.org/>  
Mail post@shiunji.org

平成29年08月 西暦2017年 佛誕2576年 皇紀2583年

## 思い込む・信じ込む

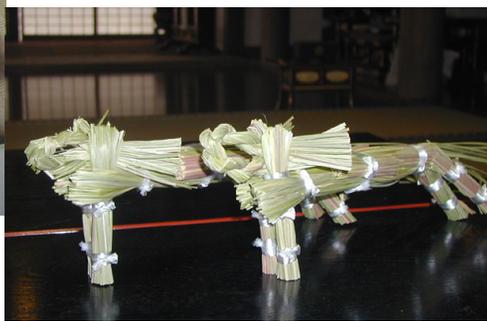
富成忠夫さんといえば植物写真の大家で、私が師と仰ぐ、植物写真の大家がおりました。

『野草を撮る』や『春の花』『秋の花』(何れも山と溪谷社)など著書も沢山あります。この先生に惚れ込んで、西新宿・住友ビルにある朝日カルチャーセンターに随分何年も通いました。

先生のご愛用は、アサヒペンタックスMXという、当時でさえ、もうどこにも売っていないという、時代おくれのカメラでしたが、「この名機でなければいい写真は撮れません」が、口癖でした。

ある時、急病になった先生の代講にお弟子さんが来ました。

そして、こともなげに「オヤジはあれが口癖だけれども、オヤジの単なる思い込みなんですよ。」と言いました。なるほど、お弟子さんのカメラは「狙ってシャッターを押すだけ」の、当時はやり始めた、いかにも値段の高そうな、デジタルカメラで



した。今、あらためて先生の写真を見ると、どの一コマも、野草が生えている雰囲気と野草そのものが写事に写しとられ、尚且つ余分なものは写っていないという名作ぞろいです。

構図、シャッター速度、ピントを決めたあとは、名機と思い込んでいたカメラに安心して任せ切る、そういうことだと思ふのです。

現代日本の良心を代表するお一人、司馬遼太郎さんが、キリスト教について「神

学者達は(あるかないか分からない神を説明するため)に、誰にも見えない(神という)糸巻きに、神学という糸をこれでもかこれでもかと巻き付け、遂にみんなに神の存在を信じさせ

た」という意味のことを言っておられます。

これも、もともとはキリスト教徒が「神のおられることは確かである」ということで、異教徒の私から見れば一種の思い込みですね。

こう見てくると「思い込む」は「信ずる」と同じことだと分ります。

昔は仏さま・神様は居

るものだとみくんが思っていましたから、あとはその思い込み・信じ込みの強い弱みだけが問題でした。

ところが、困ったことに文明開化以来時代が下るに従って、思い込めないという人が多くなりました。

それでも、人の痛みを悲しみ、人の喜びを喜び、お金の多い少ないだけが人生じゃないよ、なら目出度いですが、どうもそうではない。

逆に人の痛みを喜び、人の喜びが癪にさわる、そんな人が寧ろ多いように見えるこの頃です。

結論を言いますと、本当の豊かさは、宗教という物差しを身に付けることです。幸い、日本人は誰でも文字を読めます。

岩波新書の『仏教』『日本の仏教』『お経の話』(渡辺 照宏著)の三冊が入門書として非常に良心的でお薦めです。

やがて読書の秋。

一読、目から鱗の思いをされること請け合いです。私の手許にはいつも用意してあります。

## ほのぼのとしたお話

▼電車に乗っている小学校低学年の男子とその父親。お年寄りが一人、乗ってきた。座っていた父親が、すぐ席を譲った。

「お父さんの知ってる人？」と男子の父親は答えた。「人生の大先輩だよ」

▼満員電車で、赤ん坊が泣き出した。険しい視線が母親に集まる。と、年配の女性が母親に話しかけた。「眠いのかしらねえ」。母「うるさくてごめんさい」と謝る。女性は続けた「何言ってるの。一番大変なのはあなたじゃないの。お母さんが一番つらいのよね」。車内の空気がやわらかくなった。▼彼女は学校でいじめに遭っていた。周囲はみな傍観している。

ある日、机の中に手紙があった。「独りだと思わないで。みんな言葉に出来ないだけだから」「ファイト!」とメモも。「わかってくれてる人がいる」との思いが彼女を支えた。▼カキ、モモ、ビワ……。歩道沿いに果樹が並び、それぞれの季節、たわなに実る。土地の持ち主のおじいさんが、学校の行き帰りに子どもたちが自由にとれるよう、植えたのだ。木々の下の手入れされた花々も、人びとを楽しませる▼北海道の広い道。おばあさんが渡っているうちに、信号が赤になる。寄り添うようにしていた小学四年くらいの男子の子が、片手をあげ、止まると車に会釈した。おばあさんが渡り終える。男子は野球帽をとりペコンとお辞儀した▼

以上は、「小さな親切」運動本部(〒101-0061 東京都千代田区三崎町二の二〇の四)に寄せられた体験の、ほんの一部だ。いまの世にも、こんな話が豊かにある。

# につぼん人情小噺

## 第四十六話 絆きずな

え、世の中には変わっていいものと変わってはいけないものがあります。絶対に変わってはいけないもの。それは、「親子の絆」ではないですか。

今日は、今年の夏に起こった、ある「悲劇」を通して、そのことを皆さんと考えたいと思います。

夏休み。子供さんのいらつしやる家庭では、ふだんは忙しいお父さんたちも、この期間だけは、どなたも家庭サービスをお考えになりますよね。

休暇を取りまして、おじいちゃんやおばあちゃんの待っている故郷に帰省される方もいらつしやれば、「今年は海に行こう」とか、「キャンプをしよう」などと、家族旅行を計画する方もいますね。また、子供たちもお父さんといつしよに遊べるっていうんで、とても楽しかったでしょうね。

九州で暮らしております吉川光一さん（仮名）のお宅もそうでした。まあ、もともと地元の方ですから、帰省はしなくてもよかったですね。

吉川さんは会社員で、いつもは朝早くから深夜まで働いておりましたが、そんな吉川さんもようやく夏休みが取れることになりました。子供たちと「どこに行こうか」などと相談をしておりました。吉川さんは、奥さんの和江さん（仮名）、小学校一年生の隆君（仮名）、保育園児の宏美ちゃん（仮名）の四大家族。仲の良いご家庭です。

「いよいよよ、パパも夏休みが取れそうだよ。どこに行こうか」  
「海がいい！」  
「パパとドライブ！」

その夜も来るべきお父さんの夏休みを楽しみに、子供たちは眠りにつきました。「それにしても、ひどい雨だわ。台風でもないのに、こんなに強い雨が続くなんて変な天気ね」

「そうだなあ、地球温暖化の影響だろうね。日本は亜熱帯地方になっちゃったみたいだな」

吉川さんと妻の和江さんがそんな語りをしていて深夜、けたたましく電話が鳴りました。

「大変です。近くの川が氾濫しました。このままでは、川沿いの吉川さんのお宅は流されます。早く公民館に避難してください！」

「隆！ 宏美！ 起きて、起きて！ 大変よ、逃げるのよ！」

和江さんはあわてて、隣の部屋で寝ている子供たちを起こしました。吉川さんが家のカーテンを開けて外を見ると、まるで白い槍のような雨が地面に突き刺さり、家の前には黒い濁流が押し寄せていました。

「逃げるぞ！ 俺は隆を連れて出るから、君は宏美を頼む」  
ところが水の勢いで玄関のドアが開きません。

ふたりで必死でドアを押して、ようやく外に出ました。出たとたん、体じゅうが滝にでも打たれたがごとく、びしょぬれです。吉川さんの家の前には、小さな川があるのですが、吉川さんの目にはどこが川なのか、道路なのかまったくわからないほどでした。そして、あつという間に、その泥水は膝まで達してきました。

「隆！ 宏美！」  
吉川さんはあらんかぎりの大きな声で叫んだのですが、その声も豪雨と濁流の音でかき消されてしまいました。

翌日、吉川さんと隆君が、自宅から六キロも離れた田んぼのなかで、寄り添う

ように亡くなっているのが見つかりました。

お父さんの腕と隆君の腰は、ロープできつく結ばれていたそうです。腕には、隆君を支えたロープの跡が深く深く刻み込まれていました。

「たとえ流されても、子供と絶対に離れない」吉川さんの強い思いが、発見者の涙を誘いました。そして、「いつも寝顔しか見てやれんから、休みの日はしっかりと遊んでやるんや」と言っていた吉川さんの口癖も、人づてに伝わり、近所の人たちはそれを聞いて、泣き崩れたそうです。

そして、さらにその翌日、残念ながら、その近くで妻の和江さんと宏美ちゃんも遺体も見つかりました。激流のなか、身を寄せ合っていたのでしょうか。宏美ちゃんの顔には、かすり傷ひとつなかったそうです。近くに落ちていた、和江さんが持ち出したと思われる黒いポストンバッグが遺品となりました。

警察がなかを開けると、バッグがはちきれんばかりに、隆君と宏美ちゃんの着替えが、ぎつしりと詰まっていたそうです。本当の意味での「親子の絆」……。ご冥福を心から、お祈り申し上げます。

くれました。お二人とも、もう亡くなりましたが、こうして『まんだら通信』に残っています。▼今月の野草はミソハギ【ミソハギ科ミソハギ属】。草丈1~2m。今ごろの暑い盛りに咲きつります。まだ暑さのこの季節ですが、所謂盆花は秋の七草、カワラナデシコ、オミナエシ。キキョウなど涼しげな花ばかりでホッとしますね。



亀田病院で詳しい診断をお願いしました。和頼先生と同じで、身体に栄養をつけましょうと、4種類の栄養補給の飲み物を沢山出してくれました。▼表の写真。精霊棚は、お隣、大谷（おおやつ）のおじいさんが、10年ほど前に作ってくれたものです。何をしても丁寧で帳面でしたから、それに甘えていつもお願いしていました。精霊さまの馬の方は、西横渚の屋号こびいのおばあさん、きくさんが作って

▼立秋が過ぎて、名前だけは秋になりましたが、本当の暑さはこれからが本番ですね。▼曾野綾子さんや佐藤愛子さんは私などより遙かにお年寄りですが、とても死にそうにもないお元気そのもの。それに引きかえ私はいえれば肺気腫（COPD）が進んで息切れがひどくなるばかり。先日、和頼先生に診てもらったら、「これはもう立派な栄養失調」だそうです。で、20年来のかかりつけ、

## 余滴